

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ⑤

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

触媒でいい

2002年7月、わたしは宮崎のとあるホールの壇上に立っていました。ホールは満席どころか、通路の階段に座っている人もおられます。その数、およそ300人とのことでした。約2時間半、夢中で話をしたわたしに、みなさんは大きな拍手をくださいました。これが生まれてはじめて自分のことを「講演」というかたちで話した経験でした。

それに先立つ1月、セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク（STN21）と宮崎県同和教育研究協議会（県同教）の交流会があり、わたしはそこに参加しました。STN21側の参加者のうちトランスはわたしだけ、あとはみんなゲイでした。自己紹介の時間になると、ゲイの人たちは自分のことを話しはじめ、県同教の人たちは興味深そうに話を聞かれています。しかし、トランスをはじめて3年ほどしかたっていないわたしには、自分のセクシュアリティについて話せることはほとんどありませんでした。しかたないので、自分の教育実践について話をしました。事務局長のNさんはそんなわたしの自己紹介に、他の人たちとは別の興味を持たれたようでした。交流会が終わったあとも「京都の同和教育について知りたい」といって、わたしを引き止められ、夜遅くまで語りあいました。

4月のある日、Nさんからメールがきました。講演依頼のメールでした。「なにをしゃべればいいのですか？」とたずねたわたしに「いつきさんの話をして下さい」という答が返ってきました。

何を話そうかと悩みました。話せることなどなにもないわたしにできることはひとつしかありません。それは、できるだけ正直に自分のことを話すことです。

「性別違和に気づいたのはいつ？」と聞かれることがあります。それに対するわたしの答は『「性別違和」という言葉を知った時』です。わたしがトランスジェンダーという言葉を知ったのは1997年、35歳の時でした。あるいは「性別違和」という言葉を知ったのは、さらにその4年後、2001年に『性同一性障害の基礎と臨床』という本を読んだ時でした。それまで

はモヤモヤした気持ちにつけられる言葉は、せいぜい「変態」くらいしかありませんでした。であるならば、ライフストーリーが35歳に到達するまでは、トランスジェンダーという言葉も性別違和という言葉も使わないでおこうと思いました。そうすることで、わたしの気持ちを追体験してもらえないんじゃないかなと考えたのです。もうひとつ考えたことは、けっしてわたしは常にしんどさを抱いていたわけではないということです。例えば、トランスジェンダーという言葉と出会う前は、「女性の身体を獲得したい」という気持ちは「空を飛びたい」と同じくらいに実現不可能なことでした。そんな夢は、忘れてしまえば、わたしは「普通の」人でした。それどころか、当時も今も、わたしは充実した教員生活を送っています。だからこそ、教員としてのわたしの話をしたいと思いました。

そしてなにより思ったことは、「わたしのことを理解してほしいというメッセージは出さないでおこう」ということでした。それまで何十回となくさまざまな当事者の話を聞いてきました。話の中にある「こんなにしんどい状況の中に置かれている」というメッセージを聞いたたびに、差別の現実に怒りを覚えながらも、一方で「うらやましい」という気持ちとともに、「語れるしんどさ」への嫉妬心が心の中に渦巻いていました。そんなわたしが、語る場を与えてもらったのです。であるならば、わたしの話を聞いた人に、あの時のわたしのような思いは絶対にしてほしいと思ったのです。わたしの話は触媒であればいいと思いました。おそらく誰もが自分の中に語れないしんどさを持っている。わたしの話を通して自分の中にあるそういうしんどさを思いだしてもらい、それと向きあってもらった時、そこに共感が生まれるんじゃないかと思ったのです。「いつきさんの話を聞きながら、ずっと自分のことを考えていた」という感想をもらうことが、たまにあります。そんな時、話してよかったと思います。

宮崎の講演で、もうひとつ学んだことがありました。それが、それは次号で書くことにします。